

Title	手話言語の記述的研究
Author(s)	米川, 明彦
Citation	大阪大学, 1985, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/28352">https://hdl.handle.net/11094/28352</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【1】

氏名・（本籍）	よね 米	かわ 川	あき 明	ひと 彦
学位の種類	学	術	博	士
学位記番号	第	6927	号	
学位授与の日付	昭和60年6月24日			
学位授与の要件	文学研究科国文学専攻 学位規則第5条第1項該当			
学位論文題目	手話言語の記述的研究			
論文審査委員	(主査) 教授 宮地 裕 (副査) 教授 徳川 宗賢 助教授 前田 富祺			

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は日本の伝統的手話言語（JSL, Japanese Sign Language）を言語学的に分析・記述したものである。（1984年11月，明治書院刊，A5版364ページ）

JSLをはじめ，手話言語は，言語を研究する者の間にその現実が知られておらず，誤った考えを持つ者も少なくない。言語研究は音声言語・文字言語のそれであったから，言語の特徴なり定義なりもその観点だけから論じられた。本論文は音声言語・文字言語とはその伝達手段の異なる手話言語（ここではJSL）の構造・体系を明らかにして，手話言語学の基礎を固めることを目指している。

本論文は3部から成り，第1部は「手話言語の概説」，第2部は「手話言語の構造」，第3部は「手話言語と文化」である。

第1部第1章は「手話言語の定義」であって，一般のジェスチャーとの区別を論じている。

第2章は「手話言語の歴史」であって，明治の聾教育の中で「手勢法」が考案され，速記者たちがさまざまな手指法を考案したことをはじめ，資料の紹介を含めて，従来明らかではなかったJSLの歴史を記述している。

第3章「手話言語の種類」では，同時的手話・伝統的手話・中間型手話の3種類があり，また地域によって語形が違うことを述べている。

第4章「手話言語に対する関心」では，社会一般の関心が1981年の国際障害者年から急速に高まったが，行政中心であったことを述べている。

第5章「手話言語に関する誤解」では，手話言語がパントマイムだと世界中普遍的だとかいう無知に起因する七つの誤解があることを指摘し，これを通じて手話言語の実態を説明している。

第6章「手話言語の研究史」では、アメリカの過去20年間の研究史を解説し、草創期にある日本の10年間の研究史を記述している。

第2部は本論文の中心であって、第1章「手話因子論」では、手話単語を構成する最小単位の設定・種類・特徴、その結合の仕方と制約を扱い、手話言語を構成する要素を「手話因子」と名づける。この手話の3大因子（手の位置・手の形・手の運動）は、単語ごとに具体的なものであり、これを下位概念とする上位概念を「手話素」と名づけて、各因子の手話素の目録をあげる。3大因子の下位分類に3小因子（手の方向・手の接触点・両手の関係）を立て、これら大小6因子によって手話単語の具体的な形を記述している。また、手話単語の形成には、視覚的にまたは運動的に複雑さを減らそうとすることなどによるいくつかの制約があることを述べている。

第2章「手話形動論」では、手話形態素の種類・語構成・変容・派生・変成を扱い、音声言語の形態論に対して「形動論」と名づけ、単独で引用された標準的な形の手話単語を「代表形」と呼び、代表形とはやや異なるが別の意味を表わすものではない実現形を「異形態」、代表形・異形態を総括する抽象概念を「手話形態素」と名づけて、その実現形の形態的特徴を論じている。

次に、複合語の語構成の形態的・意味的・機能的特徴、手話言語の造語力を述べ、変容・派生・変成がJSLの少ない手話単語を補って多くの機能を果たすことを述べている。

第3章「手話統語論」では、アメリカの手話言語（ASL）とイスラエルの手話言語の語順研究の方法論・問題点をあげ、語順を中心に、JSLの文構成の法則を述べている。その基本的語順はSOVであり、文の中心は動詞とその変容であるが、変容が格関係の決定に重要な役割を果たしており、JSLは空間の配置と運動の方向と上体移動という、空間と視覚とを十分に利用して文を構成するものである点に特徴があることを論じている。

第4章「手話語彙論」では、多義語の種類とその起因、意味の反対ばかりでなく運動方向の反対でもある対義語の表現の特徴、および、基本語彙の特徴を述べ、総じてJSLの表現はASLに比べて表意的であって、日本語の表記体系が反映していることを論じている。

第3部第1章「手話言語の特徴」では、五つの特徴として、同時性・図像性・非手指運動的機能・視覚的制約・コンテクストへの依存をあげている。

第2章「聾者の文章」では、聾者が書く作文へのJSLの影響を調査し、彼らの作文にJSLと一致する点が多く、彼らのJSLがその作文に影響を及ぼしていることを述べている。

第3章「文化とのかかわり」では、手話言語に取り入れられたジェスチャーが、その属する文化と別個に独立しては存在しないことを述べるとともに、手話言語に敬語が発達しない理由を考察している。

第4章「手話言語の芸術」では、言語の美的表現機能という点から、手話劇等について言及している。巻末に、内外の参考文献を列挙し、索引を付す。

## 論文の審査結果の要旨

本論文は、日本の手話言語の言語学的研究の著述として、わが国で初めてのものであって、手話言語の定義・歴史・現状・研究史等の第1部(約90ページ)、および手話言語の特質その他の第3部(約40ページ)を前後に据え、中心を手話言語の構造分析と総合的記述の第2部(約170ページ)に置いて、体系的な記述を果たしたものである。

手話言語はパントマイムや偶発的ジェスチャーとは異なり、一定の体系を持つサイン言語であるが、国ごとに、地方ごとに差異があり、世代による違いもある。手話言語は世界中一様なものかどうか、音声言語を手で不十分にうつすものにすぎないとかいう世の一部の誤解を解くことも、本研究の意義の一つとなっている。

中心の手話言語の構造の分析と記述には、記述的構造言語学の枠組みが利用されている。一つにはASLに関する先行の研究を取り入れたからであり、一つには日本の記述的形態論の成果を取り入れたからである。これらをよく消化活用している所にも論者の着実な努力が認められるとともに、音声言語との異同を明らかにするのに有効な方法であった。将来は独自の方法や体系がありうるかと思われる。

音韻論に当たる手話因子論では、3大因子(手の位置・形・運動)と3小因子(手の方向・接点・両手の関係)とで手話単語が形成されることを、具体的に記述し、音素に当たる手話素には、3大因子で計87を立て、標準形と異形を分かって、複雑な手の動きを詳細に分析・記述しており、新見が多い。実際の手の動きなどとの対応の記述には、なお工夫の余地があろう。

一方、手話単語の形成には、身体運動・視覚性等からする制約があって、現在のJSLの単純語は約1千語、複合語を加えて語彙約2千数百語にすぎないが、それらを活用し変容することによって、動きの様子・数・テンス・アスペクトなどをこまかく表現し分け、時には、上体の動き・表情・目の向きにも類型としての意味を持たせていることを記述している。新見を含めて、有益かつ示唆に富むところである。

形態論に当たる手話形動論は、手話言語にあっても統語論(構文論)とのかかわりが大きいのが、品詞の区別が明瞭でなく、助詞・語尾変化もない手話言語では、複合語の構成が主要な課題であって、その内的意味関係を7類15種に分類して記述している。とくに副詞(句)は手の運動をジグザグにすることによって「ジグザグ」の意を表わし、強く運動させることによって「とても・非常に」の意を表わすなど、変容による表現が多いという指摘は注目すべきことの一つである。

手話統語論では、基本的語順SOVと基本的構文のほか、その変容(上体移動と方向変換)によって格関係が表わされることもあることなど、ここでも変容の役割が指摘されるほか、自動詞文・他動詞文・受動文・使役文等への言及があるが、これらについては、まだ精密な記述が果たされているわけではない。今後の課題の一つと見られる。

手話語彙論では、抽象上位概念語が少なく、基本的機能動詞用法の「かける・つける・とる・ひく」等を欠き、慣用句もごく少ないなどの手話言語の特質に対して、指文字の使用による意味の細分化をはかることなどを提案している。建設的意義を持つことと思われる。

本論文は、一般の言語研究者にとって有益な記述が多い。音声言語との体系的比較がほぼ理解できることも評価しうる。論者の久しい手話体験、とくに伴侶との間での体験は、研究に深みと幅を与えている。

もとより、言及した二三の問題点もあり、残された課題も多いけれども、本論文は、論者の研究者としての資質能力をよく示すものである。学術博士（課程）の学位申請論文として、十分価値あるものと認定する。